

丸山ダム見学の実態と今後の展望

鈴木 美香

丸山ダム管理所（〒505-0301 岐阜県加茂郡八百津町鵜の巣1422-5）

ダムカード（カード型パンフレット）やダムカレーに見る近年のダム人気で、丸山ダムの来訪者も増加傾向にあり、水源地域活性化のためのインフラツーリズムにも力を入れているところである。今後、新丸山ダムの本体着工を控える中でも来訪者を増やし続けるために、より良い見学対応の在り方を模索し、検討を行う必要がある。

キーワード：水源地域活性化，インフラツーリズム，新丸山ダム建設

1. 丸山ダムとは？

(1) 丸山ダムの特徴

丸山ダムは、全長 229 km の木曽川の河口から 90 km 地点に位置し、左岸は岐阜県可児郡御嵩町、右岸は同県加茂郡八百津町に接する重力式コンクリートダムである。

丸山ダムの特徴の一つに国土交通省と関西電力(株)の共同管理という点が挙げられる。各々の管理目的は、国土交通省が洪水調節、関西電力(株)が発電である。このうち洪水調節については、最大 6,600 m³/s の流入量を 1,800 m³/s 調節し、4,800 m³/s の放流を行うものである。



図-1 平成 30 年 10 月 2 日の放流

もう一つの特徴にその歴史がある。昭和 18 年に日本発送電(株)によってダム建設に着工するも、太平洋戦争のため中断する。その後、電力再編成で事業を承継した関西電力(株)によって昭和 26 年に本格的に着工し、昭

和 31 年 3 月に全ての工事が完成する。丸山ダムの堤高は 98.2m であり、建設当時は日本で初めての 100m 級のダムであった。全面的な重機械化施工となった丸山ダムは大ダム時代の到来を告げ、その技術は佐久間ダム（静岡県）、黒部ダム（富山県）へと引き継がれた。

現在 63 年目を迎える丸山ダムは、平成 28 年 12 月に 60 周年記念のイベントを行っている。

(2) 新丸山ダム建設

丸山ダムには、新丸山ダム工事事務所による新しいダム（新丸山ダム）建設の計画があり、丸山ダムから 47.5m 下流の位置に一部が丸山ダムと重なる形で施工され、高さも 20.2m 嵩上げされる。これにより、洪水調節容量が現在の 2,017 万 m³ から 7,200 万 m³ に増加し、洪水調節機能が約 3.6 倍強化となるだけでなく、発電能力も約 12% 増加となる。工事期間中も洪水調節と発電の機能を持続しつつ、大規模な嵩上げを行うという手法は過去にも前例がなく、その施工は技術的にも大きな注目を集めている。丸山ダムはその役割を次世代の新丸山ダムにバトンタッチし、ダム湖の中から木曽川の安全を支え見守ることとなる。

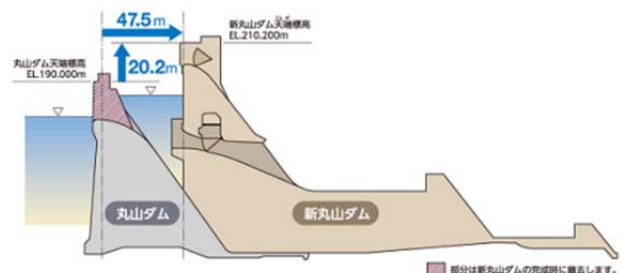


図-2 新丸山ダム完成図
(新丸山ダム工事事務所ホームページより)

2. 丸山ダムにおける広報

(1) 来訪者数の増加とその要因

丸山ダムへの来訪者は、数年前と比較すると、近年増加の傾向にある。ただし、ダムへ足を運んだ方の人数を全てカウントすることは困難であるため、便宜的に、管理所で配っているダムカードの配布枚数を来訪者数として扱っている。

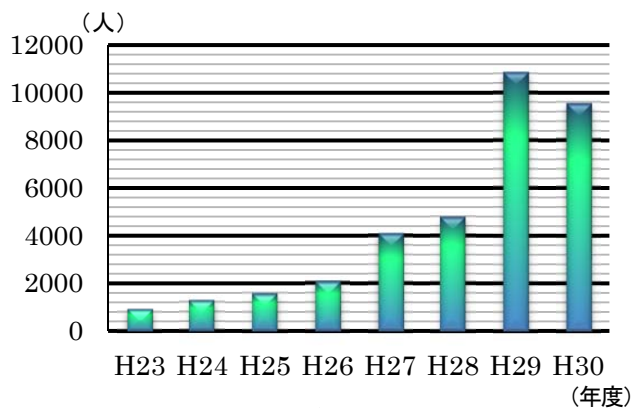


図-3 丸山ダム来訪者数

グラフから分かるように、平成29年度に来訪者数が急激に増加している。これには主に二つの要因が考えられる。一つ目は、平成29年2月に丸山ダムカレーが全国ネットのゴールデンタイムのテレビ番組で取り上げられたことである。ダムカレーとはダムをモチーフにしたカレーで、堤体をごはんでダム湖をルーで表している。現在、丸山ダムカレーは八百津町内の4店舗で提供されており、それぞれの店舗で工夫を凝らしたオリジナルのダムカレーを味わうことができる。二つ目は、平成29年4月から新丸山ダムのダムカード配布が始まったことである。当カードは新丸山ダム工事事務所だけでなく丸山ダム管理所でも配布をしているため、新丸山ダムのカードを求めての来訪者が増えたと思われる。

一方で、平成29年度と比べると平成30年度は、若干ではあるが数値が下がっている。カード配布枚数を来訪者数として扱っていることを踏まえると、ダムを訪れてもすでにカードを入手済みのため、もう取りには来られない方（リピーター）やダム周辺には展望台やダム下流側に架かる橋など管理所以外の見学スポットがいくつかあるため、それらの場所からダムを楽しむ方の存在が考えられる。実際のところ、丸山ダムへは自家用車またはバイクで来訪される方が大半のため、管理所の駐車場に来られた方の人数（受注者等の関係者を除く）をカウントし、カードの配布枚数と比較する調査を行った結果表-1のようになり、カードの配布率は平均50%前後であった。簡易な調査ではあるが、カードの配布枚数だけでは掴みきれない多くの方々に足を運んでいただいていることが推測できる。

表-1 ダムカード配布率

調査日	駐車場人数	カード配布数	カード配布率
8/25(土)	58人	27枚	46%
8/26(日)	91人	34枚	37%
8/27(月)	20人	9枚	45%
8/31(金)	11人	7枚	63%

(2) 平成30年度の取り組み

a) 「ダム展」への出展

美濃加茂市民ミュージアムにて、ダム展というイベントが開催され、当方も協力という形で関わり、いくつかの展示物を提供した。チラシには、丸山ダムを正面から描いた絵が使われた。丸山ダム下流域に位置し、昭和58年に大きな水害のあった同市とは、今後も様々な形で連携し、繋がりを維持していく必要性を感じる。



図-4 ダム展チラシ

b) ポップアップカードの作成

地元八百津町で行われる産業祭に、毎年新丸山ダム工事事務所と合同でブースを出しており、ダムカードを立て掛けられるポップアップカード作りを行った。一部細かな作業もあり、小さいお子さんには難しく感じたかもしれないが、丸山ダムと新丸山ダムのそれぞれの形を忠実に再現したポップアップカードで地元の方々に丸山ダム・新丸山ダムへの愛着や理解を深めていただいた。



図-5 ポップアップカード

3. 丸山ダムにおけるインフラツーリズム

(1) 目的と経緯

2. (2) で平成 30 年度の取り組みについて述べたが特に力を入れたのが、民間旅行会社によるインフラツーリズムである。インフラツーリズムの目的は、ダムの働きや役割を広く周知することはもちろん、ダムを観光資源として活用し、水源地域の活性化を図ることにある。

スタートは平成 28 年度で、丸山ダム見学を行程に組み込んだ八百津町内を巡るモニターツアーであった。丸山ダム 60 周年の記念に何かできないかと、八百津町及び旅行会社に呼びかけ、実施に至ったものである。翌 29 年度にはそのツアーを 1 回から 3 回に拡大し、より多くの方々が参加しやすくなるよう、ツアーの発着地を美濃加茂から名古屋に変更した。また、4 月の八百津だんじり祭りと丸山ダム見学を組み合わせツアーも企画され、29 年度はトータルで 2 社 4 回のツアーが行われた。

(2) 平成 30 年度開催のツアー

3 年目となり、4 社 4 回のツアーが行われた。

表-2 平成 30 年度開催ツアー一覧

開催日	旅行会社	ツアー名	料 金	人 数
8/25 (土)	名阪近鉄 旅行(株)	夏のスキカモ トレジャーハンティング	大 4,000 円 小 3,000 円	31 名
10/20 (土)	(株)農協 観光	八百津の魅力 たっぷりツアー	大 4,000 円 小 2,000 円	29 名
10/28 (日)	東鉄観光 (株)	八百津・可児・ 御嵩を巡る!!	一律 2,980 円	21 名
12/8 (土)	岐阜乗合 自動車 (株)	ダムカードを 集めよう	一律 6,500 円	15 名

a) ツアー名：夏のスキカモ トレジャーハンティング

スキカモプロジェクトという岐阜県加茂エリアのいいところを発信するプロジェクトのモニターツアーで、八百津町からは丸山ダムが選ばれた。その他の行程には、美濃加茂市と川辺町の施設が含まれており、夏休みのため親子連れの参加が多かった。ツアー中は晴れていたがそれまでの降雨で4つのゲートから放流しており、迫力満点で好評を得た。（※安全に配慮したうえで実施）

b) ツアー名：八百津の魅力たっぷりツアー

平成28年度から継続している八百津町を巡るモニターツアーである。丸山ダムの他には、八百津せんべい焼き体験をしたり、この時期に旬を迎える栗きんとんを商店街で購入したり、まさに八百津の魅力を満喫できる内容となっている。昼食はもちろん丸山ダムカレーで、命のビザを発行した外交官、杉原千畝の記念館も訪れている。

c) ツアー名：八百津・可児・御嵩を巡る！！

八百津町・可児市・御嵩町を巡るモニターツアーで、名鉄広見線活性化協議会の事務局が置かれる御嵩町企画課と調整を行った。名鉄広見線の御嵩駅を発着地とし、可児市の道の駅可児ッテ、御嵩町の中山道御嶽宿も巡る行程であった。御嵩町から提供を受けたツアー後のアンケート結果では、特に印象に残った観光スポットとして20名中19名が丸山ダムを選んでおり、ツアー全体の感想の中でも丸山ダムについての記載が目立った。

【良かった点】

- 店員の対応が親切でした。
- 丸山ダム内の見学が特に良かった。
- ダムの説明が良かった。
- ダムからの風景が良かった。
- 説明がわかりやすかった。ガイドも親切だった。
- ガイド・スタッフが優しかった。

図-6 ツアー全体についての感想

d) ツアー名：ダムカードを集めよう

バス会社によるダムカード収集を目的としたツアーで矢作ダムや小里川ダムも併せて巡っている。12月のため少々冷え込んだが、担当者の方からは「来年度以降も企画したい」との声を頂戴した。しかし、このツアーは他の3ツアーと比べると、料金は割高で、参加人数も少なめとなっている。これは当ツアーがモニターツアーの扱いではないため、地元自治体の関与がないことが大きな要因と考えられる。将来的にこのタイプのツアーを増やすことは必須であるため、担当者の方からの意見や感想を重視し、課題や工夫点を整理していく必要がある。



図-7 各ツアーの様子

(3) ツアー対応時の工夫

ツアーによる団体客の受入れにあたり、工夫した点を紹介する。まずは、事前の情報把握である。具体的には、旅行会社及び地元自治体と事前連絡を密にし、参加者の年齢層や雰囲気をつかんだ。それによって、年齢層が高い場合は時間的に慌てずに済むような無理のない行程を設定したり、子どもが多い場合は子ども用資料を用意するだけでなく、ペットボトル等を用いた実験でダム役割を説明する時間を設けたりした。



図-8 子ども向け実験の様子

また、操作室案内時には、ダムの放流映像を放映した。見学時には放流していない場合が大半であるためダムの役割への理解促進にも有効であると考えた。



図-9 放流映像放映の様子

他にも、1班を10名程度とし、安全確保及び細かな説明に努めた。ただし、撮影担当者を更に確保すると管理所職員のほとんどが動員となり、土日出勤も増えワークライフバランスの観点から課題となっていた。そこで、職員だけでなく、ダム管理支援業務の委託職員にも1班を任すこととした。これはツアーに限定せず学生等の団体見学時にも実施した。見学対応に必要な職員数が単純に1名減になるだけでなく、当初は想定していなかった下記のような効果も見られた。

直接的な効果：委託職員に依頼する必要があるため、班分けや見学行程の設定作業に早めに着手するようになった。（従前は直前の作業となることも多く、慌ただしかった。）

間接的な効果：見学対応にあたらないう1名（他の仕事ができる1名）について、自分がそれにさせてもらうか、他の職員に譲った方がよいかを判断する必要があるため、そのときの自分の業務量を改めて把握し、整理できる。判断にあたり、周囲の状態に普段以上に目を配るため、職場内のコミュニケーションも増えた。

4. 丸山ダム見学の今後

(1) 今後の課題

近年のダム人気に加え、新丸山ダムの本体着工を控えた丸山ダムは、今後更に来訪者を増やす可能性を秘めている。水源地域活性化のためにもそのチャンスを確実に掴むべきであるが、解決すべき課題も存在する。

a) 新たな見学スポット

展望台や橋など、丸山ダムは周辺にいくつかの見学スポットを抱えるが、それらのほぼ全てが新丸山ダム建設における施工ヤードとなり、取壊や立入不可となる。駐車スペースやトイレ・地元住民への配慮等も踏まえたうえで、工事中・完成後それぞれの時期に適した見学スポットを設ける必要がある。

b) ダムカード配布場所

現在、カードは管理所のみで配布しているが、見学スポットと同様に管理所も施工ヤードとなるため、今より高台の位置に造られた建物（新管理所）へ移転する。しかし、新管理所に移転するとダムからの距離が今より遠くなり、来訪者の方がカードを入手しづらくなることが懸念される。管理所以外の新たなカード配布場所の可能性も含めて、検討を要する。

c) 新丸山ダム工事事務所との連携

今までは見学における対象物がダムそのものであったが、今後は新丸山ダム建設の工事を見せる形にシフトしていく。丸山ダム管理所単独では到底対応できないため、新丸山ダム工事事務所との連携が今以上に不可欠となり、更なる強化が求められる。

(2) ハッ場ダム視察でのヒント

そんな課題を抱えた中で、平成30年11月に新丸山ダム工事事務所の職員に同行して、関東地方整備局ハッ場ダム工事事務所が建設を進めるハッ場ダムの現場を視察した。

a) ハッ場ダムの見学スポットと周辺施設

ハッ場ダムには、ダム上流のハッ場大橋はもちろん左岸側にやんば見放台、右岸側に展望スペース、そして『なるほど！やんば資料館』なる施設もあり、工事を見せることを重視した様々な見学スポットが設置されていた。加えて、温泉や道の駅など集客力のある施設が近隣に複数存在しており、見学者の多くがダムと併せてこれらの施設を訪れていることが伺えた。

これを丸山ダムに置き換えると、今までは新管理所とダムの距離が気になっていたが、ダムから離れた分杉原千畝記念館を含む人道の丘公園という八百津町の主要集客施設とは大変近接するようになる。当該施設の一般来訪者を管理所へ誘導しやすくなるのはもちろん、当該施設と管理所・ダム見学をセットにしたツアー行程を従前より組みやすくなり、ツアー誘致においてはメリットとなりうる。逆に、ダムを目的に八百津町を訪れた方が、ダム以外の八百津町の魅力を発見する一つのきっかけとなることも期待できる。

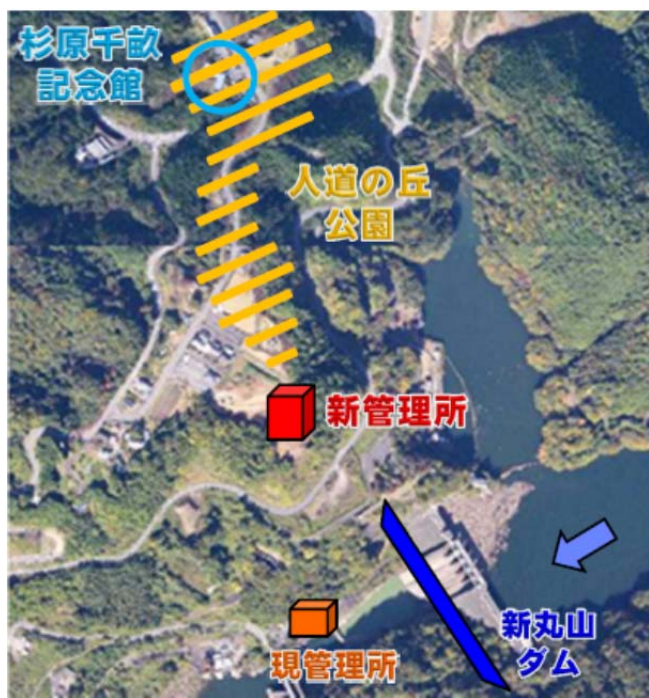


図-10 新管理所の位置関係

b) ハッ場ダムのカード配布と見学対応

ダムカードについては『やんばツアーズ』やオリジナルスタンプラリーの参加者に現地で日々多くの枚数を配っており、今まで「どの施設で配ろうか？」という考えばかりだったため、新たな視点となった。

そして、日々行われている見学対応は、丸山ダムのそれとは規模が全く異なり、圧巻であった。まず驚いたのは『ぶらっと見学会』なる一般見学を平日（木曜を除く）は1日2回、休日は1日5回、予約不要で対応していることである。（※視察時点）加えて、その見学対応者（説明者）は、基本的に期間業務職員3名と業務委託職員3名という点も参考になった。（※期間業務職員の土日対応はなし）しかし、一般見学以外にも夜間の見学会や季節限定の見学会などが多数開催されており、説明者以外にも安全確保等で人員が必要なため、平日休日を問わず事務所職員が多数同行しているとのことであった。

丸山ダムでも業務委託職員に見学対応の1班を任せようになり、今後はその増員を行うとともに、期間

業務職員も見学対応にあたるよう準備・練習を始めているところである。これからも、ハッ場ダムの事例から学べる部分は大いに吸収し、可能な範囲でモデルとしていきたい。



図-11 ハッ場ダム見学者の様子

(3) 今後の展望

最後に職員の意識面について触れ、まとめとしたい。最も強く感じていることは、ダム管理所という環境で幅広い担当業務を抱え、かつ働き方改革の取り組みが進む中で、広報業務の位置付けを職員全員で共有したいということである。ダム管理所である以上、まずは確実に適正なダム管理を行うことが最重要事項であろう。そして、その次に重視することが広報業務ならばそのことを全員で認識し、共有したいのである。なぜなら、管理所の職員は少ない。全員が同じ方向を向いて力を合わせなければ、新丸山ダム建設により日々景色が変わっていく、まさに過渡期の丸山ダムの広報業務に対応しきれないと考えからである。広報業務は裁量の余地が大きいので、手を抜いたら抜いた分だけ成果もそれに比例してしまう部分がある。だが、少ない人数だからこそ、全員が共通認識のもとに同じ目標を持ってしっかりと意志疎通を図っていけば、それは大きな武器になりうるし、今後の大きな変化への対応も可能ではないだろうか。

管理所内の一体感を新丸山ダム工事事務所はもちろん水源地域の自治体も含めたより大きな形に広げ、新丸山ダム建設に要するこれからの時間をこの地域全体で盛り上げ、実りあるものとしたい。この時期に丸山ダム管理所に勤務できることを前向きに捉え、積極的な姿勢で広報業務を展開していきたいと考えている。